鳥、鳥

鵯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳥、鳥

【Ｎコード】
Ｎ０１３８Ｐ

【作者名】
鵯

【あらすじ】
鳥を飼う兄とその弟の話です

兄様は言葉を話す事が出来ない。
難しい事は良く分からないが、何でもわたしが産まれてくる前に酷く精神を病んでしまってそれからずっと喋れなくなってしまったとの事だった。
近頃、兄様の精神が一層不安定になってきたのでわたしは何か気休めになるものを贈ろうと兄様を連れて街に出た。
本当は父様と母様がそうしてあげれば一番良いのだろうとも思うのだが、わたし達の両親はずっと離れに籠ったきり出て来ない。
わたしと兄様は数人の使用人と共に本邸で暮らしている。
昔は沢山居た使用人は次々と辞めて行き、残ったのは三人だけになってしまった。
使用人達は広い屋敷の家事に追われていて忙しい。
だから兄様の精神が不安定になっても中々気が付かない。
そう言う訳でわたしは気が付いた時、一緒に街に出る様にしている。
余り街に出る事のない兄様は、こんなに暑い日だと言うのにしっかりと長袖の上着を着込んでしっかりわたしの手を握って歩く。
そしてわたしのポケットには兄様の薬の瓶が入っている。
時間になったら兄様に錠剤を飲ませないといけない。
兄様はこの瓶を自分で持っていると直ぐに規定の摂取量以上の薬を飲んでしまうのでそうならない様にわたしが薬の管理をしている。
「兄様、何か欲しいものはありませんか。」
首を横に振る兄様。
わたし達は石畳の上を偶に休みながらもう何時間も歩いている。
色とりどりの幟がはためく大通りを歩き、瑞瑞しい果物の並ぶ商店街を抜けると随分寂しい路地に出た。
わたしは兄様の手を引っ張ってそろそろ戻りましょうと言った。

しかし兄様は何かに導かれる様にふらふらと路地の奥へ入って行く。

「兄様、そっちは危ないですから。」

わたしは慌てて兄様を追い掛ける、すると先の方に何かぼんやりと赤く光るものが見えた。

近付いて見てみるとそれは小さな店の軒先にぶら下がっている丸い提灯の灯りだった。

こんなところに店を構えているなんてと不思議に思いながらその店の前に立って薄汚れた看板の文字を読もうとした。

その時、店の中から甲高い動物の鳴き声がしたのでわたしは驚いて窓から中の様子を伺った。

ペットショップの様だった。

入り口の引き戸を少し引くとガラリと開いたのでわたしは兄様の手を引いてその暗い店内に足を踏み入れた。

天井には所々今にも切れそうな裸電球がぶら下っていてチカチカ点灯しており、その僅かな灯りの下で檻に入れられた動物が蠢いている。

どの動物も檻の向う側で息を顰めて此方を伺っている。

その時兄様は店の隅で埃を被っていた鳥籠を見つけて来て、大事そうに埃を払った。

兄様が籠の鍵を開けると中から金色の小さな鳥が出てきた。

「その鳥が欲しいのですか。」

それならば会計をしなくてはいけないとわたしは店の人を探したが、店内には檻が延々と積まれているだけで人は見当たらない。

そこでわたしは鞄から財布を取り出して鳥が入っていた小さな鳥籠の上に何枚かのお札を置いて店を出た。

驚いた事にその金色の鳥は兄様の肩に大人しく止まったまま、一向に飛んで行こうとしなかった。

兄様の部屋には家具が一切置かれていない。
と言うのも兄様は過去に箪笥の中に劇薬を隠していたり、ベットの天蓋にロープを張ったりしていたので、危険に思った使用人達が全て片付けてしまったのだ。
窓には何本もの鉄格子が嵌められていたし、兄様の部屋の扉には鍵が掛っていた。
その鍵はわたしがいつも首から下げている。
そして食事の時間には、わたしが兄様に水とパンを届けに行くことになっていた。
使用人達は広い屋敷の家事に追われていて忙しい。
兄様の部屋はまるで大きな鳥籠だった。
殺風景で何も無い部屋だったから兄様は部屋の角で膝を抱えて座っている。
そんな具合だったから兄様が鳥を飼い始めたのはとても良い事だとわたしは思った。
兄様は鳥をとても可愛がって、家に居る時は部屋に籠ってずっと一緒に遊んでいた。
兄様が寂しくないようにとわたしが遊びに行かなくても大丈夫だろう。
良かったなとわたしは思った。
もし、父様と母様が離れから出て来て兄様と一緒に暮らす様になって優しく抱き締めてあげれば兄様の具合はもっと良くなるだろう。
また喋れる様になるかもしれない。
産まれてこの方、わたしは一度も兄様の声を聞いた事が無かった。
だから兄様の声が出る様になればこんなに嬉しい事は無いと思った。
そこでわたしは父様と母様を説得する為に離れに出向いた。
離れにある一室には屏風が立てられており、わたしはその正面に

座った。
　屏風の向う側に父様と母様が居るのでわたし達は屏風越しに話をする。
「父様母様どうか本邸にお戻り下さい。兄様もわたしも早く家族皆で暮らしたいと思います。」
　だれかとおもえばあらまあ。
　わたしたちのこどもじゃありませんか。
「お願いします。どうか元の通り一緒に暮らして下さい。」
　こんにちは。
　ごきげんよう。
「父様母様、兄様は前に比べて大分良くなりました。街に出る時も怖がらなくなりました。」
　ほほ、それはそれは。
　それにしてもあついこと。
「兄様の手首の傷も大分癒えてもう夜中に泣く事も無くなりました。」
　ところでしようにんはいまなんにんだ。
　きちんとせわをしてくれていますか。
「三人居ります。それから兄様は鳥を飼い始めました。」
　これはまた！だいぶへってしまったな。
　それからおまえはことしでいくつになったのかい。
「十になりました。兄様は十二になりました。」
　きょうはどうしてここへ。
　きょうはどうしてここへ。
「どうか本邸に戻ってください。そうすればきっと兄様は完治します。」
　そうですね。
　そうですね。
「兄様は将来、この家の後継ぎになる方です。どうか早く治してあげて下さい。」

その時、ちりちりと鈴が鳴って使用人が時間ですと言って迎えに来たのでわたしは部屋から出て行かざるを得なくなってしまった。
その次の日もわたしは時間の許す限り、父様と母様を説得した。
わたしは何日も離れに泊まり込んで、漸く父様と母様を説き伏せてどうにか本邸で暮らしてもらえる様になった。
それでわたしは父様と母様の手を繋いで本邸に戻った。
「兄様、兄様。父様と母様です、父様と母様が帰って来ました。これでもう大丈夫です。」
わたしは兄様の部屋の扉を叩いてそう言えば、と思い出した。
鍵はわたしが首から下げていた。
わたしは鎖を引っ張って服の中から鍵を取り出した。
鍵は錆びてしまっていた。
わたしが離れに居る間、誰が兄様の世話をした。
使用人達は広い屋敷の家事に追われていて忙しい。
わたしは急いで部屋の鍵を開けて中に入った。
兄様はいつもの様に部屋の角で膝を抱えて座っている。
兄様の前には以前、わたしが運んだパンと水を乗せた盆が置いてある。
その盆の取っ手に止まり、コップの底に残った僅かな僅かな水を飲んでいるのはいつかの鳥だった。
皿はとっくに空になってしまっていて、パン屑ひとつ残っていなかった。
「お前が食べたのかい。」
わたしが鳥に手を差し伸べると彼はわたしの手に飛び乗って元気そうに鳴いた。
兄様は自分の食事を全てこの鳥にあげてしまったのだろう。
「鳥には毎日水と餌をあげなくてはいけませんよ。放っておいたら死んでしまいます。」

兄様に鳥を買ってあげた日にわたしは確かにそう言った。
兄様はこくんと頷いてそれからは毎日自分のパンと水を少しずつ与えていた。
「兄様、兄様、起きてください。父様と母様が帰ってきましたから。」
わたしが懸命に身体を揺すっても兄様が一向に目を醒まさないので父様と母様は離れに帰ってしまった。
三日三晩兄様を呼んでも起きなかったのでわたしは漸く兄様が死んでしまったのだと分かった。
鳥には毎日水と餌を与えなくてはいけなかったのにわたしはそれを忘れてしまっていた。
わたしは冷たくなった兄様を背負って部屋を出て扉に鍵を掛けた。
それから庭へ出て兄様の身体と錆付いた鍵を焼いてしまった。
煙になった兄様を追い掛ける様に金色の鳥が空へ飛んで行く。
そのささやかな葬儀の参列者はわたしひとりだった。
使用人達は広い屋敷の家事に追われていて忙しいし、父様と母様は相変わらず離れに居る。

（２０１０１１０３）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0138p/

鳥、鳥

2010年11月19日22時12分発行